

輝いています



「世代を超えた交流も卓球の魅力です」と、高橋さん

センター卓球部のアイデアマン

ひと

たか はし あき かず
高橋 昭一 さん

自作マシンで卓球の楽しさを



▲▶ 高橋さんの
お手製マシ

初 心者でも楽しくプレーができる福祉・児童センターの「センター卓球部」。毎月開催されているこの教室で、蕨市卓球連盟の一員として子どもたちに卓球の魅力伝えていくのは、高橋昭一さん（75歳・南町3丁目）です。卓球歴60年、若い頃は「剛」、現在は「柔」のスタイルで相手を翻弄する高橋さん。今も仲間と週5日汗を流し、「年齢に応じたプレーをできるのが魅力です」と、目を細めます。そんな高橋さんの指導法は成

功体験を通じて楽しさを実感してもらうこと。ラリーが続くとその醍醐味を得やすいことから、正しいフォームの習得へ根気よく指導しています。更に子どもたちのためにと製作したのが卓球マシンです。人の打球よりも安定したボールが出ることから、基礎練習に有効なこのマシン。重工業メーカーの元技術者の腕を生かし、2年前に完成した自信作です。マシンから出たボールをネットに打ち込むと、ボールは卓球台下のボックスから管を経て、再び排出される構造になっています。市販品では十数万円する物も高橋さんの手にかかれば、身近な材料で同等の性能に。テンポよく一定のコースにボールを放ち、参加者からも大好評です。こうしてコツをつかんだ子どもたちが自主的に練習し、上達していく姿に「活動の励みになりますね」と、にっこり。現在、参加者のレベルアップを見据えて、マシンの改良を計画している高橋さんは、「カットやドライブのボールが出るようにしたいですね」と、目を輝かせます。尽きない卓球愛とあふれる探究心でこれからも子どもたちの心にスマッシュを決めていくでしょう。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

— No.13 —



現在の茨城県古河市で生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
～明治22年(1889)

貞節を守り孝道を全うした女性を「節婦」、類いまれな行いのあった女性を「奇女」といいます。本作品は、右幅に節婦、左幅に奇女が3人ずつ描かれた双幅の掛軸で、写真はその右幅です。上から渡辺省亭(1852～1918)による常盤御前、小林永濯(1843～1890)による大磯の虎女(曾我の仇討の兄・曾我十郎祐成の恋人)、そして、一番下が暁斎の静御前です。静御前は源義経の側室で、鎌倉鶴岡八幡宮で義経を恋慕する歌を誦しながら舞い、人々を感動させました。暁斎はりりしい表情の静御前を描いています。

河鍋暁斎記念美術館 期間=6月25日(日)まで
国際博物館の日記念「暁斎 その交流さまざま」展

開館 = 午前10時～午後4時
休館 = 木曜日
毎月26日～末日
ところ = 南町4-36-4
入館料 = 一般320円
中学生～大学生210円
小学生以下105円
(20人以上の団体は要予約)
詳細 = 同館 ☎441-9780



展示会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください



暁斎ほか合筆
「節婦奇女」
双幅の内右幅 絹本着色

本作品は展覧会で御覧いただけます